
D.C. ～ダ・カーポ～ 舞い散る桜への願いごと

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C 〱 ダ・カーポ 〱 舞い散る桜への願いごと

【Nコード】

N5394Y

【作者名】

えーさく

【あらすじ】

家の庭の桜の木の下で寝ていたら、何時の間にか初音島に居た。今は懐かしきD・C 二次小説黄金時代に執筆していた作品を手直しを入れながら投稿していきます。微妙に他作品のクロスとかゲストがあります。ジャンルは原作知識持ちトリップです。

プロローグ

しんしんと、雪のように舞う桜の花びらを見つめて幾星霜。
とある世のとある地のとある家の庭先で、

「舞い散る桜の下で願いは叶う……」

掠れながらも鈴の音のような声が木霊する。

初春の夜のまだ冷たい風が頬を撫でていく。

「もし桜が願いを叶えてくれるのなら……良いんだけど、ね」

桜の木に背を預ける少女のような少年は、手元にある本を見る。

それは願いを叶える桜の木が紡ぐ物語りがかかれた物だった。

「ふあああ……ねむい……」

少年はひとあくびをしてそのまま眠りについた。

しんしんと、雪のように降る桜の花びらが舞い散る。

少年を包み込むように、舞い散る桜の花びらは落ちていった。

プロローグ（後書き）

今は懐かしきD・C・黄金時代。私がこっちの世界に入るきっかけをくれた作品です。

S c e n e . 1

S c e n e . 1 『夢から覚めたら』

薄ら寒さに眼を覚ました。

「クシュッ!...寝ちゃってたのか……」

ぼーっとする頭を起こす。

「うう...さ、さむっ、本気で寒い!」

ケープは肩しか温かくなならないし、直ぐ部屋に戻るつもりだったから厚着もしてない。

「てか、ここ...ドコ?」

辺り周囲を桜の木に囲まれ、背中を預けていた呆けるほど立派な桜の木。

「スゴく……おつきいです。……キシュッ」

ネタやってる場合じゃない。本格的に風引きそう。

とにかく動くことにした。じっとして身体を冷やすよりはマシだと思ったからだ。

「良かった。荷物も一緒にあった」

黒いキャスターカバンにはD・Cのパラダイムノベルと同じD・CとSHUFFLE!の漫画。デモンベインの小説が寿司詰め状態で入っている。まあ、とりあえずそこらはどうでもいい。

カバンを引きながらとりあえず歩き出す。

幸い足元は月明かりで照らされているから危なくはない。多分。

「それにしても、桜桜桜桜　　桜ばっかりだ」

桜……………桜かあ……………。

立ち止まって携帯を取り出してヘッドフォンをつけて曲を流す。第2ボタンのツインヴォーカル。俺がD・C系で最初に聴いて覚えて、一番好きな歌だ。なんというか歌詞が感動的なんだよ。次点は暁の詩だ。あれは結構曲調も歌も切なくて涙うるるだ。

「~~~~~」

曲に合わせて口ずさむ。お陰で少し温かくなってきた。

「おろ？」

桜林の途中で岩肌が見えた。洞窟みたいだ。

「~~~~~ん」

入るか否か悩む。

確か洞窟の中って温かったんだっけ？

今、携帯の時計は夜中の1時。これから余計寒くなるし、下手に体力も使いたくない。

俺は洞窟の中に入った。

しかし数分歩いて違和感を感じた。

足の踏みしめる感覚が土や石から鉄の感じに変わった。壁もだ。明らかに人間の手が加えられていて鉄板張りになっている。

「行き止まり？」

10分くらい歩いたかもしれない。でも行き止まりだった。洞窟の最奥は鉄板で塞がれていた。

「不自然だ……」

暗闇に慣れきった目で壁を見るも、これで行き止まりと言っよりは

……

「隔壁？」

そんな考えが浮かんだ。隔壁の内側に入れば温かいかもしれない。

俺は壁を調べまわした。大体隔壁というのは開放する為の端末ないし非常時用の緊急開放の為の何か、手動開放の類があるはずだからだ。

「これ……」

隔壁に非常用と書かれたボタンがあった。

個人的には非常時故、躊躇いなく押させてもらった。

すると近くの壁が反転し、取っ手が現れた。

「ビンゴ」

取っ手に近く。時計周りでopenと矢印付きで書かれていた。

「ふんっ！…ぐっ、ぬぬ、ぬあああー！！」

とてつもなく固い取っ手を全体重を使って回す。明日絶対筋肉痛だよコレエ。

取っ手を回していくと、隔壁の一部がスライドして開く。防火扉みたいだ。

とりあえず人が1人入れる幅を開けると、荷物を持って内側に入った。やっておいてアレだけど、防犯的に大丈夫なのかなアレ。

とりあえず隔壁の内側に入ったけど少し温い空気だけどまだ寒い。

奥にはまだ通路が続いている。

「行きますか…」

カバンを引いて歩き出す。

そしてまた数分歩いた時だった。

コツツ

「ふえ？」

いきなり身体感覚がぐらりと前のめりに

ビタンツ！

「ギャン！」

思いつ切り顔面からイった。

「あううう（泣）」

とりあえず鼻血とかは出なかった。

「イタタッタ……い、いつたいなに？」

注意しながら立ち上がると視界が真っ白に染まった。

いや、急な光りの変化に眼が追いついていないだけだ。

「なんだなんだ、騒々しい。いったいミナツの睡眠を邪魔する輩は誰だ？」

そんな声が聞こえた。はて、どこかで聞いた声だ。

眼が光に慣れると、こちらをジッと見つめる女の子が居た。

「お前は誰だ？研究所の人間には見えないが…」

「み、美夏　！？」

「む？如何にもミナツはミナツだぞ」

胸を張るミナツを名乗る少女。

外側に跳ねる青いショートカットの少女。

背中からコードっぽい物が生えてるように見えるのは彼女がロボットだからだ。でも、え？コレは夢？それともドッキリ？

「どうしたんだ？固まったりして」

「や、えと、な、なんでもないよ」

「そうなのか？ 顔色があまり良くないぞ」

「そりゃあそうでしょうよ。」

Scene・2

Scene・2 『ロボットxトリッパー』

天枷美夏

型番HM-A06型ミナツ。

限りなく人間に近い。いや、人間そのもののロボットだ。
ロボットと言うよりは人造人間だと俺は思っけれど。

「それで、お前は何者だ？研究所の人間でないのなら、侵入者か！
？」

「や、ちょ、た、確かに侵入者かもしれない、てかバリバリ侵入者
だろうけど俺の話しも聞いてくれ！」

「むう。まあ、ミナツは最新型だからな。人間一人にどうこうなる
ことはないから、話しくらいは聞いてやるぞ」

「（ほっ……）」

なんか思ってたより気性が荒くなくて良かった。

とりあえずありのままの事態を美夏に話した。

自分の家の庭で寝ていたら何時の間にか見知らぬこの土地に来ていて、寒さをしのぐ為に此処に入ったこと。

「なる程な、もしかしたら誘拐事件に巻き込まれたのかもしれないな」

腕を組み推論を呟く美夏だが、多分それは違う。てか絶対違う。何故ならば、俺はそもそもこの世界に居る人間じゃないからだ。

今は2003年の1月。そしてここが初音島であることを美夏から聞いた。

そこで何らかの理由で俺がトリップしてしまったのを悟った。

D・C系でトリップ物なんて随分と久しいネタだけれど、まさかそんな体験を自分がするなんて思ってもみなかった。まあ、厨二病+コジマ感染者の為に、そこまでびっくりはしなかった。てか生で美夏と会話してる時点でもう死んでも良いかも。

「まあ、ここに居れば大丈夫だし。いざとなればミナツが護ってやるから、安心して寝てて良いぞ」

「や、さすがに女の子に頼りっぱなのは悪いから起きてるよ。その代わり話し相手になつてよ」

「別に構わないが、眠くないのか？」

とりあえず荷物を取り上げられなかったのは良かった。取り上げられてたら色々な意味で死ねたよ。

それでもって、尋問？みたいな事を受けたけれど、一言言つと物凄く怖かった。とにかく怖かった。

とりあえず財布にあった身分証明関係、といつても保険証を提出したけど、世界が違うし、この世界に俺が居るならどつちかが偽物
まあ、俺が偽物って扱い受けるし。最悪SHUFFLE！とかデモンベインを持ち出すしかない。あれらは2003年には無い物もあるからカードとしては少しなりは使える　　と思いたい。

尋問された個室でデモンベインを読みながら待ち続けること三巻目を読み終わって四巻目を読もうとしたら部屋のドアが開いて一人の女性が入ってきた。

赤い髪にメガネをかけて白衣を着る女性。俺の識っている人だ。

「すまなかつたな。少々怖い思いをさせて」

「いえ、ミナツの存在を考えれば消されていて文句は言えない立場ですから」

「あたし達は技術者だからそんなことはしないさ」

この人が来たのは、やっぱり学校の先生をしているからだろうか？

「あたしは白河暦。よろしくな、星乃希美君」

「は、はあ、よろしくお願いします」

まさか自己紹介から始まるなんて思わなかっただけに生返事になってしまった。

「別に取って食うことはしないから安心しな。まあ、直ぐには無理か……」

「あ、あははは？」

なにせ刑事ドラマチックな怖い尋問のされ方をしたから……未だに少し震えてる。もともと怒鳴られるのが大の苦手……というよりトラウマなだけに余計に。

「手荒過ぎたのはこちらにも非がある。すまなかった」

「いえ、そんな。本は自分ですから、謝られても」

「そうか、だが本当にすまなかった」

「いえ、えと、はい」

なおも謝る暦先生に、俺はそう返すしか出来なかった。

「さて、君が提示してくれた情報を調べたんだが、同性同名者は複数居たが、『君』自身は何処にも居なかった」

並行世界の自分、異次元同位体は居ないらしい。嬉しいやら嬉しくないやら。

「そもそも保険証の発行年数が平成23年の時点でおかしいんだが、わざわざこんな偽造をする意味もない」

まあ、そりゃあそうでしょう。偽造じゃないんだから。

「で？君はいつたい何者だ？」

「……暦先生は、並行世界とか信じますか？」

「並行世界。こりゃまた大きく出たね」

「信じられないかもしれませんが、俺は…自分は並行世界の未来からやって来た……と思います。原因不明で自分もどうしてここに居るのか不明ですけど」

「確かに並行世界だ未来だが真実なら、君の存在には納得行くけれど、証拠がないんじや君が嘘でたらしめを言っているとした判断はされないんだ。君が入った場所が場所だけにね」

そう言う暦先生は目を伏せて言った。表情がわからないから暦先生がどう考えているかわからない。でもアレを出したら……や、待てよ。

俺はバックから一冊の小説を出した。

ファ 通文庫の三巻目だ。表紙は暦先生が良く知る人物達。

「星乃、それはいったいなんだ？」

「これは自分達の世界で出回っている本です。あまりに危険な為、開示は出来ませんが、証拠物としては申し分ないかと」

見せられるD・C系の物はこれ位しか手元になかった。

暦先生の目つきが鋭くなる。むっちゃ怖いんですが！

「星乃、その本はあたしが預かるっ」

「え！？そ、それはちょっと……」

「ならそつちのカバンの中身を預かろうかね？」

「どうぞお納めくださいお願いしますこつちの中身は御勘弁くださいませ」

「よろしい」

本を暦先生に手渡すが、完全に手渡し終わる前に一言言つとかないと。

「暦先生」

「なんだ星乃。まだ何かあるのか？」

「いえ。一つ約束してください」

「大体は想像はつくがな。わかっている。ことりにも見せないし、あたしも読むつもりもないから」

「お願いしますね」

本を手離すとようやく空気が落ち着いた。

「それで、君の話を総合するに、君は今居場所がないのは確実だな」

「ええ、まあ、そうでしょう」

なにせ別世界の人間だから当たり前だ。

「出来れば送り返してやりたいところなんだが、あたし達にそんな技術力はないからそれは出来ない。すまないな」

「いえ、向こうには、家族は居ないので未練もありませんから、お気になさらずに」

「そ、そうか、辛いことを言わせたな」

「いえ、もう昔のことですからお気になさらずに」

「そう言ってもらえると助かる。…でだ、今の諸々の事情と事態から、君にはしばらく監視がつく。まあ、建て前だな。」

「ええ、わかりました」

「しばらく肩身が狭いかもしれないが、生活はこちらで保証する用意がある。代わりに少し手伝ってもらいたい事があるが」

そこで一旦言葉を切った暦先生。

文無しとしては破格の条件だけど人体実験とかはやだなあー。

「心配しなくても専門的知識は何も要らない。誰にでも出来ることだが、せつかくなら同年代の方が良いかもしれないからな」

「同年代？」

「いったい何をやらせたいんだろうか？」

「なあに、簡単な話した。ミナツのサポート係をするだけだ」

「…ああ、なる程」

50年後でああなら、多分産まれたばかりの彼女には余計に誰かしの力が必要なのかもしれない。単なる憶測だけど。

「察しが良くて助かる。まあ、あの子は私達には何処か遠慮的だから、歳の近くである程度責任感のありそうな君に任せることにしたのさ。この様子だとミナツのことも知っていたんだろう？」

「ええ、まあ、はい」

「煮え切らない返事だなあ。男ならもっとシャキツとしろシャキツと！」

「は、はい！」

思わず立ち上がって背筋を真っ直ぐにして返事をする。

こ、暦先生に指導して貰えるなんて……なんかもう死んでも良いかも。

「おい、戻ってこい星乃」

「ハッ　……！」

とりあえずトリップから引き戻された。

「まあ、とりあえず今日のところは部屋の片付けがあるから仮眠室で我慢してくれ」

「は、はい」

俺が返事をする、暦先生は満足げに頷き、そしてどこから取り出したのか、文庫本10冊は軽くありそうな分厚いA4の紙束を出してきた。

「し、白河センセ、この分厚い紙束は一旦なんなんでしょうか？」

「察しの良いお前が聞き返すか、まあいいか、それはミナツの仕様書だ。これでも1/10に纏めたんだ。ありがたく思えよ。とりあえず今すぐ全部覚えろとは言わないが、熟読はしとけ」

「は、はあ……」

暦先生から宿題をもらいました。

「仮眠室まではミナツに案内させる。よろしく頼むぞ、星乃」

「は、はい」

カバンにミナツの仕様書を入れて、ゲストIDなるタグを首から下げさせられ、ようやく解放された。

なんかどつと疲れた。しかも怖かった。でも暦先生に逢えたから0。その上生活もなんとかなりそうだから良かった。こう言うのつてご都合主義・デウス・エクス・マキナ・ってやつだね。

「大丈夫だったか、星乃」

「あ、えっと、うん。大丈夫だったよ。心配してくれてありがとう。美夏」

「まあ、一夜を語り明かした仲だ。少しは心配にもなるだろう。別にそんなくらいだ。あまり心配だっしててなかったしな」

「ツンデレ乙」

「ん？なんだ、そのシンデレレと言っのは？」

「ふっふっふっ、説明しよう！シンデレレと言っのは」

そのままシンデレレについて美夏に講義しながら仮眠室についた。

ミナツはシンデレレについて学んだ。

希美はミナツの仕様書を手に入れた。

希美は天枷研究所のゲストIDを手に入れた。

ミナツの希美に対する好感度が微上昇。

暦先生の説得に成功。生活権を手に入れた。

S c e n e 2 (後書き)

来年でD・Cも10年なんて実感が湧きませんね。

数年前のだからクオリティが低い……。

星乃希美（前書き）

主人公こと星乃希美の簡単な設定です。
少し内容を執筆修正しました。

星乃希美

星乃 希美

（ほしの のぞみ）

性別：男

年齢：21歳

身長：148cm

容姿：目を隠す姬カット、後ろ髪はかなり長めで脛ら脛辺りまである。心身ストレスから色は灰色。瞳は栗色。顔の造形は整っているが童顔の少女チック。

後記の事情から人とのコミュニケーションが取りにくい。しかしテニションや人によってその限りではない。しかし自分から積極的に接触することはない。

童顔で女顔に小柄な体型と高めの声により小さい頃からバカにされたりイジメを受けてた為、他人との接触に些か臆病である。

髪が長いのは女装して出掛けたりする為と極力人に顔を見られたくない為。女装するのはしていると落ち着く上に誰も自分だとは思わないから。ちなみに女装の服装はベルンカステル卿のコスプレ^{II}ゴスロリ系。パチュリーのコスプレ^{II}もやし魔女。幽々子のコスプレ^{II}和装。聖應女学院の冬服が常に常備してある。

何かしらの理由で初音島にトリップしたトリッパー。

産まれたばかりの美夏と出逢ってから色々と変わるかどうかはこれからしだい。

希美の旅行カバン。

ジェラルミン製の特注品。

四次元空間にでも繋がっているのかとツツコミたいくらい何でも入っている。

希美曰わくこれがあれば二週間は生活出来るらしい。

内容物

D・C ぐダ・カーポぐパラジウムノベル版 x 6

D・C・P・C ぐダ・カーポぐプラスコミュニケーション x 6

ファミ通文庫版 x 2

おとボク紫苑編 x 1

おとボク貴子編 x 1

斬魔大聖デモンベイン x 6

SHUFFLE! - DAYS IN THE BLOOM - x 6

ヘアアイロン x 1

櫛 x 1

服（外出用） x 4

服（寝間着のワイシャツとパンツ） x 2

その他化粧道具

七つ道具（ペンチ、懐中電灯、双眼鏡、包囲磁石、地図、ナイフ、ライター）

マッチ箱 x 4

タバコ（パラメント）

x 3

携帯灰皿×1
カロメ×4
PSP×1
専用ソフト複数
充電器×1
携帯電話×1
充電器×1
ヘッドフォン×1
ノートパソコン（WindowsXP）×1
充電器×1

以上が現在のカバンの中身である。

Scene・3

Scene・3 『女装Ⅱ 鎧なんだ!』

初音島にやって来て2回目の朝。

なんだか昨日だけで以前の半年分に匹敵するくらい濃厚な1日だと思ってしまう。

家に閉じこもって、極力人との接触を限定して避けていた日々。

でもこつちに来てから1日目で美夏に出逢うわ、暦先生に出逢うわで一気に人と接触し過ぎて疲れたけど、嫌な疲れと感じないのはやつぱり、美夏も暦先生も、俺を見ても何もおかしい目で見えてこなかったからなんだろうか？

「うん。完璧だ」

仮眠室の備え付けの鏡で服装を確かめる。

手持ちの服は7つ。

昨日着てたワイシャツとジーンズ。

そして今着てる服ともう三着に寝間着二着だ。

やっぱりこついう格好が落ち着くと感じる俺っておかしいのかな？

「う〜〜ん、悩む…」

このままストレートかツインテか意表を突いてポニテにするか……。

「ポニテだったらエリカの方がやっぱり似合うし、でも初日にこの服なら印象つけるのはベルンカステル様だし……」

白と黒のコントラストデュエットが生むベルンカステル卿コス。ちなみに向こう側もまだ寒かったからソックスではなく黒のパンストだからヘアバンドを買ってつけければほむほむ風にも出来たりする。

「うん。やっぱり最初だからベルンカステル様にしよう」

ちなみに画面前の紳士淑女の皆様。俺の言葉のフレーズがおかしいとか、コイツトチ狂っているんじゃないかと思わないでくれたまえ。俺はいたって正常で大真面目だから。

髪をヘアアイロンをかけながら櫛で丁寧に梳き寝癖を直す。毎朝手慣れたから一時間で終わった。

カバンに櫛やらアイロンを、畳んだ昨日の服と一緒に戻す。

「星乃ー！起きてるかー？ミナツが起こしにやって来てやつたぞ……？」

「おはよう。美夏。にぱー」

満面の笑顔で美夏に挨拶する。うん。この上なく今日は調子が良いや、相手が美夏だからだろうか、ベルンカステル様じゃなく梨花ちゃまになってるけど。

「……………」

「……み、美夏？」

な、なんか美夏がフリーズした。

てか頭からシューって煙り出てるんですけども！？

「ほほ、ほほほ、星乃おーーーーー！！」

「みつ　！？」

いきなり叫んだ美夏にびっくりして変な声を上げてしまった。みつ

！？つてなにみつ　！？つて！みつ！？じゃなくてみつ　！？
つてなに！？

美夏はバタバタと俺に駆け寄ると目を渦巻きにしながら鼻が触れ合い
いそうな距離まで間合いを詰めて俺の両肩をガシツと掴んだ。ちょ、
ちよつと痛いぞ。

「いいい、医者だ！医者に行くぞ星乃！！」

「はえ？な、なんでよ？」

「星乃は男のはずだ。男だったはずだ！それが一晩で女になるなど
何かの病気に違いない！早急に処置して男に戻してもらえ！！」

ロボットの目をも誤魔化す完璧さに喜んでも良いのかな？これ。

「美夏、少し落ち着きなさい」

「ここ、これが落ち着いていられるか！はや、早くしないと、もし
新型の病気で一生男に戻れなかったらどうする！？」

「………そしたら、美夏が私を貰ってくれるかしら？」

「は？」

ちよつとベルン様や杏子みたいに意地悪な小悪魔笑みを浮かべて、

美夏の頬を指でなぞりながら少し熱っぽい声で言ったら、再び美夏はフリーズした。
そして1分くらいしたらぶるぶる肩が震え始めて顔が真っ赤になつて……

ポフンッ

「みつ　！？」

盛大に白い煙りを噴いた美夏。

ヤバい。からかいすぎたかな？

「美夏ー？おーい、美夏さんやーい」

「み、みななな、みなが、がががが」

「ヤベエ……」

なんかヤバ気な美夏。

とりあえず首から引っ掛けてあるゼンマイのネジをひったくり、あんまりやりたかないけれど、仮眠ベッドに美夏をうつ伏せで寝かせて、首根っここからゼンマイを持った手を忍び込ませてネジ穴を

「会って間もない女子を部屋に連れ込んでベッドに押し倒すとはね。確かに美夏にそういう機能はついているが、見損なったぞ星乃」

「こ、暦先生！！違います！これにはエベレストより低くて伊豆小笠原海峡より浅い事情があるのですよ！」

「いまいち深いか否かの検討がつかない説明まわしだが、責任はとれよ」

「だから違うんです！」

とりあえず暦先生に美夏を再起動させて貰ったが、視線がイタい。二重の意味で。

美夏は不機嫌な怒り、暦先生は わからない。

「それで、お前はなんて格好をしているんだ」

「これには、その……」

説明するかどうか迷ってしまう。説明して理解が得られるかが不安だから。

「まあ、お前にとっては深刻な事情があるんだろうから、無理には訊きはしないけど、ミナツには謝っておきな」

「はい。…ごめんよ、美夏」

美夏の表情は未だに険しい。

嫌われちゃったかな……。

「別に、構いはしない。ミナツも慌て過ぎた。星乃のせいではないから気にするな…」

しかし美夏の顔は不機嫌そうなままで

「はいはい。この件はお終いだ。ミナツもからかわれたくらいでそう引きずるな。軽く受け流すことを学べ」

「わかりました。白河博士」

暦先生にそう言われ、一旦眼を閉じた美夏は、不機嫌な顔が直っていた。さすが暦先生。

「星乃、コイツはまだ生まれて2ヶ月だ。知識はあっても経験が伴っていない。今回みたいにコイツはからかわれたのが初めてでそれに対する自分の事に少し考えていただけだ。だからあまり気に病むな。とはいってもからかいすぎもやめろよ」

「はい。わかりました」

[illegible]

曆先生のお陰で、その後も気まづい雰囲気とかはなく。用意された部屋というか、家に案内された。二階建ての立派な平均的な家。

「今日から星乃にはここでミナツと生活してもらう」

「はいはいはい——！？」

「ふ、不本意だが、研究所からの命令だ。最新型のミナツがお前の世話を焼いてやるんだ、ありがたくに思えよ」

「まあ、人間とロボットが共同生活を送ったらどんな感じだっていうテストモニターというくらいで、定期的にレポートを提出するくらいの手間はあるが、それ以外は普通にしてもらって構わない」

「ま、待ってください！男女七歳にして同衾せずって言葉が」

「お前なら朝倉兄妹も知ってるだろう？アイツらだつて2人暮らしだぞ」

「あつちとこつちじゃ互いの立場が違います！」

片や兄妹で片や昨日逢ったばかりの他人だ。いくらミナツは了承してそうでも心の準備とか。

「女のミナツが決断したのに男のお前がうじうじするな。男ならこれくらいものもしない器量くらいみせろ」

「これには男女関係ないように思うんですが…」

しかし俺は保護して貰う立場だから文句も言えないのも確かである。

「美夏は良いの？俺なんかと一緒にでも」

「天枷博士が決定したことだ。だから、し・か・た・が・な・く、お前の面倒をみてやる」

そんなに強調せんでも（泣）

「まあ、よろしく頼むよ、美夏」

「…まあ、よろしくしてやらないでもない。ミナツは寛大だからな！」

差し出した手を握り返してくれるくらいには信用はあるみたいで良かった。

ミナツの手、柔らかくて温かったな。

握手を交わす俺達を暦先生が微笑ましく見ていたのを、俺達は知らない。

そして荷物を置いた後は遅い朝食という名の昼食を商店街の牛丼屋で食べたあとは生活必需品を買ったりなんたりをして1日を過ごした。

「それにしても何故星乃は男なのに女の格好をするんだ？」

夕食の席で美夏に訊かれた。

美夏も疑問に思ったのかもしれない。

人目を気にする俺が人目を惹きつけるような格好をすることに。

「それは……」

俺が女装するのは、自分を護る為だ。

いくら人間頑張っても絶対に人に会わないのはかなり無理がある。

それと他人を避けていても1人の寂しさを紛らわせる為の、俺が思いつく限りの手段が完璧な女装だった。

女装と言う名の鎧に身を包んで、俺でない俺を見られることで俺を護った。

学校の奴らにも何回か鉢合わせすることもあったけれどまったく気づかれずにナンパされたのは黒歴史。体験談だから言えるけど、男ってホント単純バカが多い。

閑話休題。

とにかくにも、女装は俺の鎧であることを理解して欲しい。

ノリも10%くらい混ざってるけどね。

「まだ、ヒミツ」

「む、仮にも一緒に住むんだ。隠し事はミナツはどうかと思うんだが」

「美夏がもう少し経験を積んで大丈夫だと思ったら話すよ」

「何故だか暗に子供扱いというかバカにされてるような気がするの
はミナツの気のせいかな？」

「気のせいだと思うよ」

まあ、ミナツにならそう遠くないうちに話せる……といいなあ。

Scene・3（後書き）

希美が女装する理由を簡潔に書きました。まだ逢って2日目故に理由は言えない希美でも、そう遠くないうちに言えるかもしれない。

美少女と同居なんて羨ましいよホント。

メイドさんロボとかいつになったら出るんだろうか……

Scene . 4

Scene . 4 『マフラーとわんこ』

美夏との共同生活が始まって1ヶ月。現在2月。

特にこれといったイベントはないものの、誰かが一緒に暮らしている感覚は嫌にはならなかった。多分美夏だからそうなのかもしれない。

なんだかんだ美夏は色々面倒みてくれる。

家事や買い物の手伝いとか。

でもまだ経験が伴っていないから任せっきりは少し不安。そんな理由から炊事関係は俺が、掃除関係は美夏といった分担になっている。

そんな1ヶ月間。1日の大半に暇を持て余してる俺は、美夏の仕様書全てに目を通していた。

理由は、ホントに些細だけど、それが未来に繋がればいいと思う。

にしてもHMシリーズはかなり人間に近すぎて単純に機械工学とか電子工学だけでなく人体医学の知識も必要になる。

機械関係はこれでも仮に成人だし、パソコンいじってたから努力したり時々暦先生に聞いたりしてなんとか理解は出来てるけど、人体医学については図書館とかネット、書店の至る所から資料を引っ張

り出して内容を勉強しながら理解していくしかなかった。

しかしミハルがどうかかわらないけれど、美夏はやっぱりロボットと言ふよりは人造人間に片足突っ込んでるような気がしてならない。

や、ミハルの時点でああなんだし、μで完璧ああんだから、やっぱり人造人間じゃないのかなこの子達。

でも人間らしさでんこ盛りのHMシリーズだから、こうやって俺みたいな人間も元氣が出て来るのかもしれない。

でもミハルはもう少し俺が他人に慣れないと合わないかもしれないかも。

美夏はツンデレ　ちょっと恥ずかしがり屋だからちょっと距離感置くから俺もちょうどいいけど、ミハルは突進して文字通りわんこの如く懐かれたら色々な意味で死ねるかもしれない。

まあ、今の俺に出来ることはないけど、後悔のないようには過ごしたい。

「夕呼先生とか居れば楽勝なんだけどなー」

無い物ねだりをしてても仕方がない。

自分が初音島に存在してるだけで奇跡なんだ。

D・C・の世界にマブラヴが混じってたらコワイ。

まあ、夕呼先生が居たらまた感動モノなんだけど。

「純夏は……ミハルよりはいいだろうけど、『どりるみるきいぱんち』はなあ……あれは武とギャグ修正だから耐えられるけど生で喰らったら死ぬそうだよなアレ。ノノもいいなあ。でもミハルと一緒に元気いっぱいだから今の俺には合わないかなあ……」

結論。今の俺には美夏で精一杯です。

そんな1ヶ月を過ごして、最近寒さが身に染みる時期。

一つあることに気づいた。

美夏のトレードマークとも言えるかもなマフラーや帽子、ヘアバンドが未だに彼女にないこと。

ヘアバンドは後々美春から貰うみたいな設定だったから俺が用意する必要はないかもしれないけれど、最近寒いし、いつもお世話になっているから、マフラーくらいはいいよね。

「にしても寒い……アレ着るか」

クローゼットに移した外着の中から一着手に取る。

聖應女学院の冬制服ロングスカートver。

コスプレの奴を参考に採寸して普通にちゃんと冬服として作った物で、極端に寒い場所でなければ普通に温かい。今の手持ちの服で一番温かい服だ。

一番下に黒のタートルネックを着て、制服の上からケーブを羽織り、髪の毛は三つ編みにして毛先にアクセントで黒いリボンを結ぶ。

体積が密集して少し重く感じるけれど、風もある事だし我慢しよう。

「ふふっ、人間、変われば変わるものね……」

たったの1ヶ月で誰かの為に外に出ようとする自分。

前じゃ……前の自分じゃ、考えられない。

「これで風見なんて通う事になったら、どうなってしまうのやら……」

あのメンバーに混ざれる保証はないけれど、出逢わない保証もない。

「IFの話にしても仕方がない。今は目先の事を」

部屋を出て美夏の部屋へ。

あ、ちなみにこの家の間取りは朝倉家に似てたりして、美夏は純一

の、俺　ゲフンツ、私は頼子やアイシアが居た部屋を使ってる。

「美夏、少し買い物に行つて来るから、留守をお願いね」

私がそう言つて階段を降りようとしたらドアがバンツと勢い良く開かれた。壊れるよ、美夏。

部屋から出て来た美夏は目を見開いて固まっている。

「ほ、星乃！　なな、なにを言い出し、おまおま、お前！」

「美夏、落ち着きなさい。心配はいらないよ。少し出て来るだけだから」

「そそ、そうか、星乃が大丈夫と言うならミナツも何も言えない。ただ……き、気をつけて……な」

「ええ。美夏も、留守を任せるよ」

「ま、任せろ！　最新型のミナツにかかれば留守の一つや二つ！」

胸を張る美夏。確かに頼もしいのだけれど、それが逆に心配に……。

子供に留守を任せて出掛ける親って、こんな風なのだろう。

財布や携帯関係の小物を手提げカバンに入れて家を出る。

近くのバス停からバスを使って商店街へ。

商店街にあるショッピングモールの衣服屋を目指して歩いていく。

道行く人の視線が刺さるけれど、鎧を纏う私はなんともない。

何故なら他人が見るのは星乃希美という俺ではなく、星乃希美という私だから。

「マフラー…か。…いたいどんなのが良いの」

一概に赤いマフラーでも肌触りとかあるだろうし、長さとかもあるだろうし。

うーん。悩む。人にプレゼントなんてしたことなんてなかっただけに余計。

長さは私と美夏はそんなに身長は変わらないから良しとして、肌触りは私の物差しで選んで良いものやら……。

かと言って美夏にケープは……新しい挑戦だけどやっぱりマフラーの方が似合いそうよね。

幾つか自分で巻いて見て肌触りから選んでみようと思う。

モコモコしている方が温かいけれど、夏場とかも巻きそうなら、モ

「コモコよりサラサラしている方が良いのだろうか？」

「女の子のファッションって、やっぱり難しい……」

自分の物は本からデザインされている物を選んでいるだけに、1からコーディネートしたことなんてない。

でもせっかくここまで出てきたんだから、手ぶらで帰るなんてもつてのほかよねえ。

やっぱり、美夏も連れてくるべきだった

マフラーは次の機会……でも……。

これからさらに寒くなるだろうし……。
どうすれば

「あのー？どうかしましたか？」

店員さんだろうか？

まあ、マフラー両手に悩んでいれば声くらいはかけられるか。

とりあえず振り返ってみた。直後、ザ・ワールド……！

そこには頭に？を浮かべて私を見るオレンジのわんこ、もとい天枷美春。なんで？

「あのおゝ？」

「はっ　！！……ごめんなさい。少しぼーっとしてしまっただわ」

「い、いえ、こちらからいきなり声をかけてしまったので、ご迷惑かと……」

「や、そんなことはないわ。ただ少し迷ってしまっただけ」

そう言っただけ私は美春に両手のマフラーを見せた。

「マフラー……ですか？」

「ええ、いつもお世話になっている子へのプレゼントなのだけれど、恥ずかしながら人にプレゼントをするのなんて初めてで、どっちにしようか悩んでいたの」

「そうなんですか！。それにしても、わざわざプレゼントの為に本島からやってくるなんて、その人のことがよっぽど大切なんですね」

「ふふっ、違うわ。私は一応この島の住人よ。1ヶ月前に越してきたばかりだけれど」

「そうだったんですか？すみません、美春はとんだ早とちりを」

「いいのよ。こんな格好じゃあ、そう思われるのも」

マフラーを持ったまま、スカートを摘み、軽く会釈する。

「私は星乃希美。これも何かの縁。仲良くしてやってちょうだい」

「は、はわわわ、ああ、天枷美春と申します！すす、好きな物はバナナとわんちゃんです！よよ、よろしく願います！」

頬を赤くしてバツと頭を下げた美春。美夏とはまた違う可愛さがあるわね。

「ふふつ、よろしく、天枷さん。もし良かったら、天枷さんも手伝ってくれるかしら？」

「は、はい！不肖天枷美春。お姉さまの為に尽力する所存であります！」

ビシッと背筋を伸ばして見事な敬礼を見せてくれる美春。

意外に大丈夫…ね。

そして2人で悩んだ結果。肌触りがサラサラで通気性の良いマフラーを買った。

あとは亜麻さんが被ってるピンクのリボン付きの帽子もあったから買ってみた。

美夏は受け取ってくれるかな？

そんなことを思いながら、帰り道でバナナンボーに寄った。

桜公園にあるクレープ屋さんと双壁をなす初音島で行ってみたい場所の一つ、チヨコバナナ屋『バナナンボー』。

「ハア、チヨコバナナ美味しいです。幸せです」

そう言って6本目突入の美春。私は2本で十分だわ、この子を見ていたら。

「お姉さまももっと食べましょうよ！バナナに含まれる物質バナミンは身体にとっても良いんですよ？」

「ありがとう。でも私はもうお腹いっぱいだから大丈夫よ」

「そうですか」

少しシユンとする美春。ちなみに私の呼びはお姉さまで固定らしい。あとが面倒になりそうだけど、今はいいわよね？別に。

「それにしても、美春はバナナが好きねー」

「はい！バナナは美春の身体の一部なんです！この世にバナナある限り美春はバナナと共にあるのですよお姉さま」

「ふふっ」

やっぱり美春はスゴい。傍にいただけでなんだか明るくなれる。天枷博士がミハルを造った理由もわかるような気がする。

そして人を元気にする部分は確実に美夏にも受け継がれている。そこは変わらない。

「全てのバナナに感謝を込めて、ご馳走でした」

6本目を食べ終わった美春はようやく満足したらしい。

「あら、美春。少しこっちを向いてくれる？」

「はい？なんですか、お姉さま？」

こちらを向いた美春の口元に人差し指を持って行く。

「チョコがついていたわよ」

「あう、お恥ずかしいところをお見せしました」

「ふふっ、バナナは逃げないし、今は冬だからゆっくり食べてもチョコは溶けないわ」

人差し指のチョコを口に持って行く。

ん。このほろ苦さがバナナに合うのよね！。

「はわわわわわ！！お、おお、お姉さまぁ　！？」

「くすっ、どうかしたの？み・は・る」

互いの吐息が感じられる程の近さまで顔を近づけて美春の名前を囁いてみた。

美春のこれでもって程朱い顔がさらに朱くなって

ポフンッ

「きゅ~~~~う」

目を渦巻きにしてこっちに倒れて来た。

「み、美春　！？」

「きゅーう」

からかい過ぎてしまったみたいね。

でも暴走しないで気絶ってところは美春と美夏の違いなのか、はたまた人間とロボットの違いか……。

「ロボット……か…」

私の呟きは、2月の寒い風に乗って消えた。

その後、意識を回復した美春を家まで届け、お礼の品を渡してから家に帰った。

美夏が凄く不機嫌だったのを落ち着かせるのに苦労したのは余談ね。

Scene・4（後書き）

なにか書きたいのか途中から私にもわかってません。

とりあえず聖應女学院の制服を着ると、希美は少し意地悪なお姉さまといった感じになります。

Scene . 5

Scene . 5 『なんか解らんが能力を獲得したらしい？』

最近生活リズムに余裕が出て来たのか、しょっちゅう夢を見るようになった。

無論荒唐無稽な夢物語から三流恋愛物、悪夢なんか様々だけれど、その中に幾つか、今の俺にとって少し怖いと思うのが夢遊病のように遊行症だけなら良いのに、夢の内容を勝手に身体が絵や図、文に書いてしまうのだ。

最初はただ単に無差別に書いているだけだったし、夢の内容だからさして興味となくて適当に流し見しては、こんな夢を見てたんだ程度だった。でも

「こればかりは……マズいよなあ……」

手元の紙束には、スケッチされたメイドの女性。それだけなら良かったのだけれど、問題はこれがμの設計図であること。

夢の内容は、1人の科学者が長年の年月と幾つかの試作を経て完成したロボット。しかしそれが家族をも巻き込む一大事件へ発展してしまう。

「沢井博士の夢……なんだろうなあ……。でも……これもヤバイよなあ」

とある某 謹製の血と汗とちよっぴり切ない涙の結晶のロボット三原則なにそれ美味しいの上等な人造人間の設計図や汎用人間型決戦兵器の設計構成図まである。

確かにロボットについて悩んだし、夢の中で の演奏聴いたり、一児の母とは思えない奥さんの研究レポートとかも見ましたが、これどーすんの？

μの設計図は先ず間違いない信用できる。

それは美夏の仕様書全てに目を通したから言えること。

感情を抑えるリミッター付き以外はそこまで美夏と目立って変わった構成はしていない、ブラッシュアップ版であるのがわかった。

なら多分あとの二つも本物なんだろう。

「捨てんのは……論外だなあ……」

「何をしているんだ？星乃」

「どわわわわわ！？みみ、美夏！？いつから！てかノックしろ！」

「ノックしても返事が返ったこなかったから勝手に入らせてもらった」

「入るなよ。で、何かしたの？」

「ああ、腹が減ったから朝食を」

「ああ、そんな時間か」

時計は朝8時。朝が早い美夏や俺からしたらお腹は普通に空く時間だ。

「ちょい待ってなよ。着替えて軽く髪の手入れするからさ」

「わかった」

「あ、待った、美夏」

「ん？なんだ星乃？」

「朝の日課がまだでしょう？」

「うっ」

日課という言葉聞き、身を固めながら頬を朱くする美夏。

「や、やっぱりミナツはいい。白河博士に頼」

「その白河博士から俺が頼まれてるって、もう何回も説明してるで

しょう。諦めてさっさとしなさい」

「ぐぬぬう……」

せめてもの抵抗と言わんばかりに唸る美夏。しかしこれをやらないと後が大変とわかっているだけに、観念して戻ってきた。

俺は首から下げるアクセサリを、絡みつく髪の毛を解きながら外す。

その間に上着を脱いだ美夏が背中をこちらに向けていた。

その背中の中ようど首の下あたりに、小さな穴があるのが見える。美夏の唯一外から見える機械的な部分。ゼンマイの穴だ。

「それじゃ、始めるぞ」

「ううゝ」

唸る美夏を無視して、手に持つネジを、ゆっくりとゼンマイの穴に差し込んだ。

「ひゃあっ!!」

唸っていて心の準備を忘れてたのか、少し大きな声を出す美夏。

「ほおしいのおー!!んあっ!!ま、ま……で、こ、心の……準備……が
つ、あうっ!!」

「まったく、コレはどうにかならないものかしら？」

心のスイッチを切り替え、鎧を着込んだ女の自分を演じてるからマシなもの、男だったらどうにかなりそうな艶めかしく熱の籠もった嬌声を上げる美夏。

「（なーんでこんなののかしらねえ……エロゲだから？）」

美夏の嬌声をBGMに、私は毎朝の日課。美夏のネジ回しを続けた。

I

スラスラサツサツカリカリと、食後のリビングではそんな音が静かに響いていた。

脳裏に焼き付く見知らぬ設計図同士を合わせて別の設計図として起こす作業を、俺はやっていた。

何故か、昨日までの俺なら理解は出来てもやれるハズもない事を、今の俺は平然とやっている。

あまりにもびっくりするほどの真剣さに美夏も遠慮して物音立てずに俺の作業をジッとみている。

手だけと思考の一部を作業に回しながら、俺は別の事を、そもそもこの奇妙な事態の原因を考えていた。

原因は間違いなくあの夢だ。

最近見るようになった夢の中で、強烈なりアリティのある2つの夢。

博士の傍らで働く自分。

若々しい奥さんに淡い想いを抱きながら、その人の右腕として働いていた自分。

この夢を見てからだ。

荒唐無稽で根拠もないが、厨二病頭脳は、この事態に一つの答えを一番真っ先に見いだす。

なんらかの理由で、並行世界に存在する自分の知識ないし記憶かなにかが自分に流れ込んできている可能性。もしくは因果導体となっていましたか。

因果導体

接続された並列世界間の因果の相互的やり取りを媒介する存在のこ

と。並列世界間の因果の通り道なのでこう呼ばれる。因果の運び屋とも言える。接続された並列世界間において、一方の世界の人間はこの因果媒体との物理的並びに精神的距離に比例して、接続されたもう一方の並列世界との因果のやり取りの影響を、より強く受ける。しかし因果導体に当てはめると、接続に関する部分がおかしくなる。なにせ俺は確かにロボットの事を考えたし、未来の為になるかもしれないと、こっちの道の勉強を始めたが、やらなただけマシだろうといった気持ちで始めたくらいだ。

今現時点ではそこまで、世界を超えるほど強く思ってたてはいなかった。

でも、まさかね

リビングの窓から見える桜の花びら。

もし枯れない桜が俺の願いをこんな形で叶えてしまったのなら、根拠はなくても説明はつけられる。しかし

「まんま因果導体ってのは勘弁してよ。芳乃のおばあちゃん」

「どうかしたのか？星乃」

「や、なんでもないさ」

少なくとも、エヴァとデモンベインの世界の夢を見た。

『夢』という形で情報を見たのか、『夢』を通して因果を流入しているのかで大分違う。

情報だけ見ているのなら、少なくとも世界には異変はないのかもしれないが、因果が流入しているのなら、A LとE Xを行き来した武と違い。や、複数の世界から因果流入している分。こっちの方が余計タチが悪い。てか最悪。

流入する因果情報によつては、使徒が現れるかもしれないし、宇宙怪獣とフェストウムとB E T Aがびつくりテイストでコンニチハなんてのもあり得るかもしれない。

マルチタクスなんて事が平然と出来てしまっている現状。因果流入説が濃厚なだけに、切実に情報閲覧説または魔法の奇跡を信じたくなってしまう。

ちなみに夢遊病モドキは 助手の俺のスキルである。寝ぼけて設計図を書いてしまうレベルの であるらしい俺。強く生きろ！

そして設計図を書きながら今日の1日は過ぎ、心配になりながらも眠りについた。

S c e n e . 5 (後書き)

魔法があるんだからなんでもアリだよね？

大丈夫かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5394y/>

D.C.～ダ・カーポ～舞い散る桜への願いごと

2011年11月20日07時20分発行